H22.3.2. 中国新聞

還る家はありますか

富田富士也

⑦

家族でいる意味

手間暇かける大切さ

イラスト・平松ひろし

目の不自由な子が描いた母の絵には、手が何本もあった。お坊さんから、そんな法話を聞いたことがあります。広大無辺な母の働きが「千手千眼観音」のように感じられたのでしょうか。

私事で恐縮ですが、私の妻は娘の具合が悪いとき、体温計ならぬ〝手温計〟を使っていました。額に手を当てられて安らぐ娘の姿に、手間暇かけた「手当て」の意味を考えさせられました。体の痛みや熱は無理でも、心の痛みなら取り除ける。千手千眼とは言わぬまでも、妻もまた「手」と「眼」を併せ持つ「看」護師に見えました。

ところが、こうした子育ての手間暇を非効率とみなし、手を焼かせない子を称賛するのが今の日本。そこで育った「いい子」は、親の無条件の愛が信じられません。「僕の家族には、かすみがかかっています」と言ったA君も、その一人。難関大学の合格がほぼ確実だった彼は突然、勉強を放棄して引きこもっていました。ひとりっ子で、両親はともに教員でした。

「物心ついたころから、互いに迷惑をかけない〝自立した〟家族でいた僕らは、会話はしても気持ちは通じ合わない。誰が何を思っているか分からないし、関心もない。家族でいる必然性が僕にはみえない」。たまたま家族でいるような寂しさを解消したくて、あえて「困った子」の役割を引き受けたというのです。

「目を閉じても、両親が争ったり喜び合ったりする場面が浮かばない。自分でも大人げないと思いますが、10代のうちに、家族みんなで葛藤を乗り越える思い出が欲しいと思ったんです」。彼にはそれが、受験よりも切実な挑戦だったのです。

それから数年。いつ離婚しても困らない〝効率的〟な関係を続けてきた両親も、引きこもり続けるA君に手間暇をかけざるを得なくなって初めて、夫婦でいる意味に気づかされたようです。

優等生という身を捨てて「還る家」を生み出した彼の決意には、観音様も目を細めることでしょう。

（子ども家庭教育フォーラム代表）